
桜ヶ丘

秋茄子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜ヶ丘

【Nコード】

N9295A

【作者名】

秋茄子

【あらすじ】

桜の美しい村を舞台に起こる神隠し。その被害者の妹と従兄弟の物語。終わり切っていない感がありますが、どうぞ。笑

(前書き)

ホラーっぽくないけどホラーですので、よろしくお願い致します。

桜ヶ丘は名のとおり、桜の美しい村だ。

村のほとんどは山で、下千本、中千本、上千本と、桜の開花は下から順にやってくる。

桜たちは人より遙かに長い、その生の中で、時に気紛れに人と関わり、人を弄ぶ。

昔はよく人が桜に惑い、道を失った。そして静かに降る花びらが、彼らをそつと、きれいに消してしまふ。

“神隠し”と呼ばれる不思議は、桜ヶ丘村では桜が起こしていた。そう信じられたために大昔から伝わる秘密の儀式があった。

毎年、上千本が咲いてから下千本が落ちるまでの数日、村は桃色の闇に陥る。その期間に、儀式は行われる。神隠しを起こす桜たちを鎮めるために、生け贄を桜に捧げる。

生け贄には多くの場合、何も知らない余所者の旅人が選ばれる。

今は当然廃れた儀式だけれど、今でも桃色の闇が村を覆うとき、変事は起こる。

「…つやめるよ。ってか、今んとこ余所者って言ったら俺じゃん？」
僕は毎年、この時期に叔父の家へ泊まりに来る。

いつもはその家がある辺りの下千本が咲く頃に来て、中千本が咲く前に帰るのだが、高校を卒業した今年の春休みは長いので、山が完璧に薄紅色に染まる頃を選んでやって来た。

そんな僕に従姉妹は気味の悪い怪談話を聞かせたのだ。

従姉妹の愛は自分を睨みつける僕に笑って見せる。

「心配しないで光くん、今はもうそんな儀式はないのよ」

僕は溜め息を吐く。

「ほんとにそんな儀式があったのか？」

「さあ？」

愛は笑って肩を竦めた。

「だけどちようどこの季節には毎年よく生き物が死ぬのよ。人も、何人か死んだ人がいるし、犬とか猫とか鳥とかね？」

愛はそう言って笑みをやめた。

「人…も？」

「うん。山で迷ってね。…兄がいなくなったのも、この時期だったよね」

愛は立上がり、僕の借りている客間を出ようとする。

僕は愛の兄を思い出す。愛の兄の心太兄さんは歳の離れた従兄弟で、愛と同じ年の僕もかわいがってもらった。いなくなったのは、彼が高校1年生の時…。しかし、それが思い出せない。

目を丸くする僕の前で、愛ははたと立ち止まって振り向かずにつけ足す。

「ああでも、みんなきれいに消えてしまつてて、どこを探しても死体は見つからないのよ」

「…みんな？」

僕が気味悪そうに問う。

愛は戸口で振り向いて頷く。

「みいんな」

戦慄する僕を見て、クスリと笑い、愛は言葉を接いだ。

「お風呂沸いてるから、お先にどうぞ」

生温い風に、僕は目を覚ました。

水を飲もうと、客間を出る。

春の初めとは思えない温い風に、桜が揺らめくのが窓から見えた。

「あんまり見ると誘われるわよ？」

「…愛」

後ろからの声に振り返ると愛が立っていた。

「眠れないの。…ほら、お兄ちゃんがいなくなったのもこんな生温い風の日だったでしょ？」

「…え？」

僕は首を傾げる。愛の言葉は、まるでそのとき僕もここにいたかのようで…。

愛もキョトンとする。

「…？もしかしてほんとに覚えてないの？光くん。あの時も光くん、遊びに来てたじゃない」

愛の目が見開かれる。

「だって俺は、下千本が咲く頃だけで…。生き物が死ぬのは上千本が咲いてから…」信じられない様子で、彼女は首を振った。

「あの年は叔母さんの都合で、上千本が咲いてからもここにいたでしょ？」

信じられないのは僕も同じだった。まったく覚えてなかった。

「心太兄さんは、ほんとに死んだの？」

僕は呆然と愛に問うた。

「…最後にお兄ちゃんを見たのは光くんでしょ？」

僕は愕然とした。

その僕の様子を見て、愛はくるりと後ろを向いた。

「…お兄ちゃんは、生きてる」

「あ…い？」

「だって、死体も何も見つかってないんだもの…」愛はもう一度僕を見て言い、にこりと微笑んだ。

「じゃあね、おやすみなさい」

その夜僕は夢を見た。内容はよく覚えてない。

ただ愛がいたことは覚えてる。

夢の中で愛は言った。

「光くん、いつから自分のこと、俺って呼ぶようになった？」

そのあまりに些細な問いの答えを、僕は覚えていなかった。

僕は、それを必死で思い出そうとしていた。

「光くん、ゆうべはよく眠れた？」

叔母に言われて僕は曖昧に微笑んだ。

「それより叔母さん、俺、今日は山の方に行きたいんだけど、だめ？」

下千本、中千本、上千本、それはそのまま、その辺りの地域名になっている。愛の家は下千本、つまり山の麓近くにある。

叔母は僕の申し出に少し困った顔をした。

「でも山は危いわよ？光くん何かあったら大変だし…」

渋る叔母に、僕が落胆しかけたとき、それまで黙って朝食を食べていた愛が口を開く。

「私がついて行くわ。それならいいでしょ？危険なところへは近付かない」

愛の言葉に、叔母は渋々了承してくれた。

「なんでついでに来てくれるんだ？」

二つの500mlペットボトルに麦茶を入れる愛に問うと、微笑みと問いが返された。

「光くんはなんで山に行きたいの？」

「…それは…」

特に理由はない。ただ知りたいただけ。

愛は小さく笑って、僕にペットボトルの一つを押しつけた。

「私はあなたを守りたいだけ」

僕は胸に広がる不安を押し付けて笑った。

「大袈裟だな？熊でも出るの？」

「桜のおばけがでるんだよ」

冗談めかした答えに、何故か笑えない僕を残して、愛は台所を出て行った。

桜の間を歩く僕たちを、花が見ていた。

まるですべて終わろうとしているかのような静寂の中で、そんな視

線を、僕は感じていた。そして、

「ひか…る…」

誰かに名前を呼ばれたことに、僕は気付かなかった。

愛はただ僕の前を歩いて、何も喋らずにいる。

気を張り詰めているようだった。

僕は愛の持たせてくれた麦茶を飲む。

「どこまで行くの？」

僕は愛に問う。

「中千本の途中に沼があるの。そこまでよ」

「沼？」

「あなたが最後に、お兄ちゃんを見たところ…」

「…儀式の沼？」

愛は頷く。

「底無し沼よ。沼の表面をすべて桜の花びらが覆うの。まるで沼に

沈んだ生け贄を隠すように…」

「心太兄さんは…」

愛は微笑んだだけで何も言わず、歩調を速める。

僕も黙ってついて行った。

沼についたのは夕暮れ時だった。

「暗くなってきたな」

「お昼食べてから出かけたからね」

愛は淡々と言う。

沼から少し離れて立ち尽くしたまま、愛はそれ以上何も言わなかった。

しかし、僕が沼に近付いて覗き込むと、口を開いた。

「儀式は余所者を生け贄に行われる。でも、ほとんど人の来ない村だから、罪を犯した村人が生け贄にされることもあった。神隠しも同じ。余所者か、罪人が、神隠しに会う」

僕は振り向こうとして、真後ろに愛の吐息を感じて凍り付く。

いつの間にも移動したのか分からない。

愛は続ける。

「でもお兄ちゃんは何も悪いことしていない。それにあの時、村にはあなたがいたよね。…余所者の、光くんが、いたよね？」

「…愛？」

「お兄ちゃんは、あなたの身代わりになったのよ…」

愛の暖かい両手の平が、僕の背中にそえられた。

彼女が力を入れれば僕は底無しに落ちるだろう。

「愛？俺を殺すの？」

何故か冷静に、僕は訊いていた。

「あなたが私の前で、自分を『俺』と呼ぶようになったのも、私を

『愛』と呼ぶようになったのも、それからよ」

僕は目を見開いた。

愛の手が、背中にそえられたまま震える。

涙声が言葉を紡ぐ。

「お兄ちゃんがそうしてたみたい、私を『愛』と呼び捨てにするようになったのは、それからよ…」

「愛を守らなきゃって、思ったんだ。心太兄さんの代わりに」

「お兄ちゃんは、どうなったの？」

愛の手が背中から離れて、僕は愛の方を見た。

「分からない」

僕が答えると、愛は泣きじゃくる子供のように首を振る。

慰めることもできなくて、僕は愛の手の平を僕の胸に当てた。

「少し押すだけで、僕は愛ちゃんの前から消えるよ」

幼い頃の呼称で言うてから、僕は目を見開いた。

僕の胸に当てた愛の手に、別の誰かの手が重ねられる。

僕らより少し幼い、男の子の手。それは透き通っている。

比喻ではなく、本当に向こう側が透けている。

「…心太、兄さん？」

僕の声に反応して、その場に浮き上がるように現れたのは、いなく

なつた当時の心太兄さん。

「兄さんも、僕を恨んでるの？」

不安に掠れる声で言うと、彼は少し微笑んで、驚く愛の手をそっと、僕の胸から離れた。

「愛、光、ごめんね」

愛が呆然と口を開く。

「お兄…ちゃん？幽霊？」

「少し違う。俺は神隠しにあつた」

「神隠し？」

「そう。うーん例えば、お前たちの持つてるペットボトルが俺だとする。で、麦茶が俺の気」

心太兄さんは僕のペットボトルを指差す。

「き？」

僕は麦茶が半分減つたペットボトルを見た。

「うん、気力とか、気配とかいうもの。それを。桜に半分だけ吸われた。全部吸われたら消えちゃうけど、半分だから消えない。そこに桜が自分の気を入れる」

「桜の、気…？」

「そう。それを水だとする。その半分になつた麦茶に、水を足したらどうなる？」

「…薄くなる」

「うん、そう。そんな感じで、俺は今、とても薄くなつてる。ここで生活できないほどに…」

「戻れるの？」

「桜の気を体から抜いて、新しく気を溜めれば」

「今どこにいるの？」

「気を溜めるのに適した所。でも、ちょっと心配になつて、抜けて来ちゃつた」

「気を溜めるのってどれくらいかかるの？」

「時間がかかるよ。元に戻るの、もしかしたらお前たちがいなく

なつた後かもしれない」

「そんな…」

「やだよ。心太兄さん…」

「ごめんな。でも頼むから、仲良くして…」

心太兄さんの足が薄くなる。指先から消えはじめて、だんだん上へ上って行く。

「…時間切れだ」

心太兄さんは呟き、そしてついにはその姿のすべてが消えた。

その瞬間に、風が、桜を散らした。

「今の俺は半分桜だから、今なら桜たちを鎮めて、お前たちを無事に帰せる。早く帰れ。母さんが、心配…してる…」

心太兄さんの声は、か細くなつて消えた。

僕たちは、頬を濡らす涙を拭わずに、抱き締め合うこともできず、しばらく泣いた。

家に帰った僕らは叔母に叱られながらご飯を食べて、順番に風呂に入った。

「どこ行ってたんだい？心太…」

「桜ヶ丘ですよ」

「盆でもないのに里帰りかい？」

「幽霊扱いしないでください。もう俺はここでなら実体を保てるんですよ」

「あたしの力の賜物だろう？」

「桜ヶ丘で、愛と光の前でも実体になれましたよ。薄かったけど」

「会いたい人に会えて、一時的に気の濃度が高くなつたんだらうよ。なんにしても、ムリするんじゃない。いいね？」

心太は渋々頷いた。

「分かってます。もう気を溜めることに専念しますよ…」

「そうしな。…ああ心太？」

「なんです？」

「妹と従兄弟が無事で、よかったな？」

「…はい」

心太は目を細め、桜ヶ丘に思いを馳せた。

E

(後書き)

なんだか続きそうな終わり方ですが、一応短編ですので。笑

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9295a/>

桜ヶ丘

2011年1月20日03時28分発行